

「牧草と園芸」誌 通巻500号発刊を祝して

麻布大学 教授

川 鍋 祐 夫

「牧草と園芸」誌は今月号をもって500号を迎えるという。昭和28年3月から41年間の長きにわたって牧草ならびに園芸作物の啓蒙、普及に貢献された。一貫した編集方針の元に、このように長期間の継続ができたことは、会社の順調な発展が基礎にあって初めてできたものと考えられるが、雪印種苗株式会社は今年6月東証2部に上場された。草・畜産関係の一読者として心よりお祝辞を申し上げます。

筆者は牧草について学ぶべき文献も手掛かりもなかった昭和28年ころ、開拓地の只中にあった千葉研究農場の安孫子場長（一年中長靴をはいていた）に教を乞うた縁で本誌の愛読者となった。

種苗会社の刊行する雑誌ではあるが、わが国の草地、飼料作や畜産はいかにあるべ

きか、といった広い見地に立って、その技術と経営に関する記事を多く掲載している。健康で生産的な牛を育てるには良質の粗飼料を豊富に給与しないといけない、そのため、肥沃な土壌の培養が第一、と言う哲学で貫かれているように感じられる。「飼料作物の70課題」の序文を読むと、著者の三浦梧楼さんは本誌から多くを引用されたように理解されるが、北海道から沖縄までの草地、飼料作に関する優れた記事が豊富に掲載されているからであろう。現場に役立つ新しい技術を美しいカラー写真入りで、平易、具体的に記述しているのも特徴である。

41年間というと、日本の飼料生産の発達とともに歩んできたことになる。本誌発刊のころは酪農の啓蒙期で、飼料作の面積も

「牧草と園芸」平成6年(1994年)10月号 目次 第42巻第10号(通巻500号)



「酪農発祥の地」記念碑
右の建物はバター記念館
雪印種苗の母体の地であり、
ここから当社の事業が始まる

- 「牧草と園芸」通巻500号発刊に際し、ごあいさつ ……森山 昭…表②
- 「牧草と園芸」誌通巻500号発刊を祝して ……川鍋 祐夫… 1
- 農政審答申「新たな国際環境に対応した農政の展開方向」と酪農政策の展望 ……天間 征… 3
- 日本型酪農の進路 ……萬田 富治… 8
- 飼料摂取量の推定と制御についての一考察 ……中嶋 芳也…13
- 「牧草と園芸」誌の歴史 ……編 集 室…17
- 雪印の牧草優良品種ラインアップ ……表③
- 土壌微生物発酵飼料・スノーエックス ……表④

ごく少なく、昭和30年には17.8万haに過ぎなかった。今では100万haを超え、稲に次ぐ日本農業の基幹作となった。乳牛の規模や産乳量においてもEC諸国以上の生産力となった。欧州農業が農業革命以後2世紀かけた過程を、日本酪農は4半世紀で走ったといわれる（梶井功）くらいの発展をした。この間の技術は多くの試行錯誤を経験したことは否めないが、勤勉な農家、研究、行政、普及関係各位の努力によることを誇ってよいだろう。普及に関しては、本誌もその一翼を担って貢献していることは明らかである。

ところで、草地、飼料作のこれからの展望はどうであろうか。酪農は日本経済の高度成長とともに飛躍的に多頭化、発展してきたが、昭和50年代の低成長期、平成の不況期に至って停滞的である。草地、飼料作の動きもそれらと同じように感じるのである。飼料作物の作付面積は昭和62年より、単収はそれ以前55年ころより停滞的である。飼料作面積は増えないのに牛の多頭化は進行しているので、1

頭当たりの飼料作面積は減少傾向で、自給率は次第に低下している。一方、輸入の牧草、ヘイキューブ、稲わらは激増してきている。50年代の牧草の輸入は11万t台であったが、63年には75万tと7倍に、平成3年には110万tと10倍となった。これで土地利用型の畜産は健全だろうかと考えざるをえない。輸入品との競争に負けない高品質の粗飼料を低コストで生産できるよう創意工夫をこらし、生産性を高めたい。

本誌は以前から低コスト生産の必要とその具体的対策に関し多くの記事を掲載してきたが、より一層、この方面の充実に力を注ぎ、技術者に進路を示し、畜産農民を勇気づけ、光明を与えて頂きたい。そして、草地農業とともに末長く発展されるよう期待します。



第37巻(平成元年)当時の「牧草と園芸」誌